

## 稀 有 な 体 験

北区・上町支部  
(たにもと耳鼻咽喉科・外科クリニック) 相良 有一

先日高校時代からの友人からメールが届き「稀有な体験」という題で、いくつかのエピソードがつづられていた。

その中の一つ、今ではとても考えられないようなことであった。飛行機に搭乗した際、コックピットを見学したいと申し出たところ、見学させてもらった由。いったいいつ頃のことだろう。ハイジャックが社会問題になるはるか昔のことだろう。

人生80年も生活していると、誰でも1度か2度は一生に一度しか体験しないような事に遭遇することがあるとおもわれる。

私も「稀有な体験」がある。メールで返信した。その記録である。

### その1 イランでインド人の虫垂炎の手術

1976年6月から9月までIJPC (Iran Japan Petrochemical Company) の医療班としてイランのマシャールに行ったことがある。

日本の親元会社の三井物産と鹿児島大学一外科との契約では「診療の対象は日本人に限る」ということになっていた。当時現場には日本人700人から800人がプラント建設に従事していた。IJPCの総務には英語の得意なインド人もクラークとして勤務していた。

ある日の夕方のこと、総務の方から「インド人が腹をいたがっている。見てもらえますか？」と依頼があった。色々お世話になっている総務からの依頼であり、無下にこたわることもできなかった。

もちろん契約のことは充分わきまえていた。診察してみると急性虫垂炎に間違いはない。ど

う対応しようかと迷った。当時クリニックでイラン人を診ていたDrアフィシャーが「私の名義のもとに、日本人の外科医に手術をしてもらいたい」と申し出があった。私はイランの医師免許は持っていない。クリニックのメンバーに余力はない。万一のことを考えると、だいぶためらった。

しかし、当時外科には萩原一行先生(故人)が着任しておられ、内科の中西先生、検査技師の楠元さん、看護師3人のメンバーがいた。萩原先生と相談のうえ、お引き受けする決心をした。言葉の問題は術中も総務の方についてもらい、通訳してもらった。

手術は小一時間で無事終了した。Appendicitis phlegmonosa (蜂窩織炎性虫垂炎) であった。

手術のあとが良い意味で大変だった。関係者のインド人、イラン人、日本人が即席のパーティーを開き、喜んでいただいた(草の根の国際交流ができた?)。

ゲストルームを臨時的病室にして、1週間で無事退院できた。



その1 イランでインド人の虫垂炎の術後即席のパーティーの様子(1977年7月17日)

あとで判明したことであるが、超音波手洗機の超音波発信装置が装着されていなくて、チャイムはなるが、超音波は出ていなかった。念のため煮沸水を作り、クレゾール液で手洗いをしており、問題はなかった。

今考えると危ない橋を渡ったものだと驚いている。いくつもルール違反をおかしているし、もし問題がおこっていたら現在の生活はなかったのではないかと反省している。だが貴重な経験だった。

### その2 スイスの旅行中に仲間とはぐれてしまった

2008年8月中旬の事である。鹿児島大学第一外科に同期で入局した友人3カップルと私は二女を同行、スイス旅行に参加したことがある。

旅行2日目、有名な氷河特急にST. MORITZからZERMATTまで8時間の列車旅行であった。展望車からの雄大な景色に圧倒された。

途中DIZENTISの傾斜のきつい峠を登るとき、列車を短くして負担が軽くなる作業が行われた。短い停車時間列車を降りて周りの写真をとっていたところ、あと1~2分で発車の合図があり、慌てて近くの乗降口から列車に乗り込んだ。グループの乗っている車両へ車両のなかを移動し、もうすぐというところで列車が切り離された。グループと別れ別れになってしまった。我々が乗っている列車が先に出発。ガイドとも別れてしまった。娘と二人、言葉の通じない世界へ放り出された感じ。

列車の中で親切な乗務員の方と出会い、片言の英語で「グループと別れ別れになった」「この列車はどこへ行くのか」「後続の列車はどこへ行くのか」尋ねた。グループ名を聞かれても名前はない。ガイドさんの電話番号も控えていなかった。ほとんど同じ時間帯にガイドさんから電話が入り、我々の乗っている



その2 氷河急行のAndermattの駅で後続の列車が入ってくるのを待っているところ  
(2008年8月12日)

列車が先行し、ANDERMATTの駅で合流することがわかった。乗務員の方に案内され、ビュッフェでコーヒーを飲みながら1時間ぐらい過ごした。別々になった時間帯に昼食をみんなは食べていたが、2人分は残してあり合流してからたべられた。

言葉の不自由な世界で迷い子になり連絡が取れないというのは非常に不安なことであった。幸いなことに氷河鉄道は一本線であり、先の駅で待機すれば、必ず合流できることがわかりほっとした。先についていたので、後続の列車が山を下ってくるのを写真にとれた。

このハプニングで我々のスイス旅行は一段と印象深いものとなった。グループのメンバーにはご心配をかけ申し訳ありませんでしたが。

### その3 鹿児島県の乳がん検診へのかかわり

昭和50年頃に西 満正教授が鹿児島大学第一外科の教授になられた3年目のころである。

今から先、日本でも乳癌が増えてくる。鹿児島でも乳癌は増えてくるので、乳がん検診を立ち上げようと提案された。このころ乳がん検診を始めていたのは、宮城、埼玉、群馬

ぐらいで、まだ準備段階のところが多かった。

西教授の紹介で埼玉の藤間先生のところに見学に行った。「ちちぶ」号という検診車での出張検診であった。現場を見学し、検診カードなどの参考資料をいただてきた。

鹿児島市の中央保健所長に面談、子宮がん検診と一緒に乳がん検診を行わせてほしいとお願いした。快くOKが出た。初年度はテストケースとして、鹿児島市内10カ所、1,000人を目標に準備を始めた。問診票もガリ版で手作り、会場設営等も体育館の片すみをスクリーンで囲み作った。手洗い等も自分達で準備した。検診には一外科教室の全面的な応援があり、たくさんの先生方の協力があってスタートできた。

初年度は782人の受診者の中から1人の乳がんが見つかった。マンモグラフィーも超音波診断装置もない時代で、視触診だけの検診だった。

このデータを日本乳癌研究会で発表した。そのデータをもって県の衛生部医療技官の小山国治先生のところへ相談に行き、当時の衛生部長にも見ていただいた。お二人とも非常に関心を寄せていただき、翌年の昭和51年から成人病予防協会への委託事業として、鹿児島県の乳がん検診ははじまった。

スタート時は視触診のみであったが3年目の昭和54年には超音波診断装置を搭載した検診車が導入され、視触診と超音波併用の検診となった。視触診の医師の手がたらず二外科の先生方や保健所長の先生方の協力もお願いした。

検診車の名前を母の枕詞「たらちね」から引用「たらちね」号と名付けられた。現在のマンモグラフィー搭載車の名前にひきつがれている。

現在視触診なしのマンモグラフィー単独の

検診になっているが、視触診兼用とマンモグラフィー単独では乳癌の発見率が変わらないということがわかり数年前からマンモグラフィー単独検診が行われている。

昭和61年県民総合保健センターに引き継がれ年間45,000～48,000人程度の検診が行われている。本年3月ごろまではフィルムマンモグラフィーの一部の読影にかかわってきた。

沢山の方々の協力の下、鹿児島県の乳がん検診は続いているが、まだ日本の乳がん検診の受診者は外国に比べ少なく、ピンクリボンの会が積極的に受診をよびかけている。

以上3つのエピソードについて述べたが、自分の備忘録のつもりでもある。皆さんも一生のうちいくつかの「稀有な体験」はおもちとおもうが、機会があれば皆さんの体験談も聞かせてほしい。

2020年11月21日 記